

イスラム過激派をめぐるインド・パキスタン関係の緊張について

I ムンバイ同時テロ事件への視覚

インド→パキスタンの統合軍情報部の暗躍があるとする

ムンバイでの同時テロ事件→日本人や欧米人も犠牲になったために、日本をはじめとする世界に大きな衝撃を与えることになった

※インドでは2006年にやはりムンバイで列車が爆破され、約200人が犠牲になったり、2008年もニューデリーの市場で連続爆破テロが発生し、21人が死亡したりするなど近年テロが多発するようになっている。

事件発生当初「デカン・ムジャヒディン（デカン高原のムジャヒディン）」の犯行声明が出されたように、犯行グループはインドの急進的集団であるような印象を与えていた。しかし、事件が鎮静化すると、インド政府はパキスタンのイスラム過激派「ラシュカレ・タイバ（正義の軍隊）」が事件の背後にいることを強調するようになった。

パキスタンとインドは分離独立する際に、アイデンティティをパキスタンはイスラム、インドはヒンドゥーに国家のアイデンティティを訴えたが、しかし厳密に二つの宗教が地域的に峻別されて国家を構成することはなかった。

・背景としてのカシミール問題

特に問題になったのは、ムスリム住民が多いカシミールで、1949年1月の国連決議では、インド統治下に置かれたジャンム・カシミール州の帰属は、住民投票によって決められることになっているにもかかわらず、インドはこの国連決議にいかようにも応ずる姿勢を見せていない←インドはパキスタンがカシミールを占領していると主張

・軍部へのイスラム勢力の浸透

インド政府の「不義」は、パキスタンのイスラム勢力を急進化させることになっている。南アジア最初のイスラム原理主義組織ともいえる「イスラム協会」はカシミール紛争に民兵を送り続けた。こうした民兵の中にはカシミールからの帰還後、パキスタンの正規軍の将兵になった者たちも少なくなかった。このように、パキスタンの軍部にもインドと敵対する勢力が定着するようになる。

カシミール、さらにイスラムの大義⇒パキスタン国家や国民を束ねる機能を担ってきたが、1980年代のアフغانستانでの対ソ戦争やズィアウル・ハク政権の厳格なイスラム化政策によって、パキスタンのイスラム勢力がいつそう急進化したことは間違いない。

パキスタンでは、アメリカが対テロ戦争にアフغانستانを攻撃したこと、またムシャ

ラフ前大統領がアメリカの軍事行動に協力したことによって、国内のイスラム過激派をいっそう勢いづかせることになった。

・対テロ戦争の負の成果

9・11の同時多発テロの前年である2000年にパキスタン国内で発生したテロの件数は14件であったのに対して、2008年は実に600件を超えた。テロの激増は米軍のアフガニスタンでの軍事行動を背景にするものであることは明らかで、さらにアメリカがパキスタンの部族地域（アフガニスタンとの国境地域で、パシュトゥン人が多く居住する）でパキスタン軍がイスラム過激派を制圧するよう圧力をかけ続けた。パキスタン軍が実際に部族地域で軍事行動を行い、一般住民の犠牲を出すことによって、イスラム過激派はパキスタン政府にも反感を募らせるようになっていく。

2007年7月に発生した首都イスラマバードにおける「赤のモスク事件」はそのような反政府感情を表すものだった。「赤のモスク事件」では、隣接する神学校の女子学生を含めて100人以上が犠牲になった。アメリカの対テロ戦争に協力し、「赤のモスク」を弾圧したムシャラフ大統領は、現在嚴重な警備の下での生活を余儀なくされている。

II 「ラシュカレ・タイバ（高潔な軍隊）」の思想と行動

インド・ムンバイでの同時テロ事件を起こしたとされるラシュカレ・タイバはサウジアラビアの国教であるワッハーブ派を奉ずる組織。

ワッハーブ派⇒18世紀にアラビア半島で生まれたイスラムの原点に回帰するように訴えた宗派で、ワッハーブ派の信仰をもつという点でラシュカレ・タイバはパキスタンの多くのイスラム過激派が信仰するデオバンド派とは異なっている。

デオバンド派⇒19世紀にイギリス支配下のインドで生まれたイスラムの改革運動で、イギリスなどヨーロッパ植民地支配に対していかにムスリムの内面を強化するかという問題意識をもっていた。デオバンド派はパキスタンで最大宗派となり、アフガニスタンのタリバンやパキスタンの「イスラム聖職者協会（JUI）」という原理主義的な組織もこの宗派に属す。

ラシュカレ・タイバ⇒他のパキスタンのイスラム過激派組織がカシミール問題など国内問題に関心を集中させるのに対して、より国際的な問題に関心をもち、アメリカやイギリスのイスラム世界への軍事介入、イスラエルによるパレスチナ占領などに反発している。インド・ムンバイの事件で犯行グループがアメリカ・イギリス国籍の者たちをターゲットにしたり、ユダヤ教の関連施設を襲撃したりしたのは、ラシュカレ・タイバの闘争目標を反映するものであることは間違いない。ラシュカレ・タイバはフセイン政権崩壊後のイラクにもそのメンバーを送っている。

ラシュカレ・タイバ→パキスタンのラホール近郊に軍事訓練キャンプをもち、そこでおおよそ2500人のメンバーに軍事訓練を施しているが(アミール・ミール『ジハード戦士』(作品社、2008年7月)、このラシュカレ・タイバにはパキスタンの軍部やISI(統合軍情報部)の一部が武器や資金を与えているといわれている。

パキスタンのムシャラフ前政権→アメリカの対テロ戦争に協力する姿勢を見せながらもラシュカレ・タイバの活動を黙認してきた。ここにムシャラフ政権のイスラム過激派に対する姿勢の矛盾があった。

・ラシュカレ・タイバがパキスタン国内で求心力をもつ背景

医療など社会事業を熱心に行うこともある。ラシュカレ・タイバは、2005年のパキスタンの大震災の時には、被災地に野外病院を設立し、手術までも行った。アルカーイダやラシュカレ・タイバとのつながりでアメリカによって資産を凍結されているアル・ラシード・トラストも震災の救援活動の最前線に立っていた。

パキスタンのイスラム過激派の主張や活動を強めたものに、アフガニスタンでの米軍の軍事行動があることを考え合わせると、オバマ次期政権の方針はラシュカレ・タイバなどパキスタンの過激派の活動をさらに活発にさせる可能性がある。

アメリカ→NPT(核不拡散条約)に加盟せず、核兵器をもつインドとの民生原子力分野に関する協力を推進していくことを明らかにした。これはインドの核兵器の性能向上にもつながりかねず、またNPTに加盟しているイランの核エネルギー開発に厳格な姿勢を見せるアメリカの「二重基準」を明らかにするもの。

※インドはカシミールの住民投票を促す国連決議に従う姿勢を見せていないが、ラシュカレ・タイバなどパキスタンのイスラム過激派の活動を抑制するにはカシミール問題においてムスリム住民の希求が反映されるような改善や解決が必要であることはいうまでもない。オバマ次期大統領もまた選出されるにあたってユダヤ系団体の熱烈な支持を得た。イスラエルではパレスチナ人に対する強硬な姿勢で有名なネタニヤフ元首相が政権の座に返り咲く可能性も指摘されている。オバマ政権になってもアメリカの親イスラエルの姿勢に変化がなく、中東和平プロセスの進展には明るい展望が見えてこない。

加えてムシャラフ大統領を継いだパキスタンのザルダリ大統領は、昨年パキスタンに帰国するまでイギリス国内での不正で摘発される可能性が何度もあったほど腐敗で悪名高い人物で、パキスタン政治の将来を懸念させている。さらに、インド国内におけるムスリムの社会的地位が向上する見通しもほとんどなく、ムンバイでの事件を受けてヒンドゥー教徒とムスリムの対立が激化していくことも考えられる。ラシュカレ・タイバなどパキスタンのイスラム過激派が台頭を続ける要因は根強く存在し、南アジアが急速に流動化していく可能性は高いといわざるをえない。

※ラヒムッラー・ユースフザイ氏の話によれば、パキスタンやアフガニスタンにはオサマ・

ビンラディンと行動を共にしていたアルカイダのメンバーはもはやほとんどいないだろうということだった。欧米の学界でもビンラディンと行動を共にしていた活動家たちは「オリジナル・アルカイダ」と表現されるようになった。

Ⅲ アフガニスタンと南アジアのリスクの増大

アフガニスタンの現状は危機的状態にある

ボン会議に始まった政治プロセスは事実上崩壊状態にある→アフガニスタンの情勢はパキスタンを不安定化させ、アフガニスタンから戦闘性がパキスタンに移入された。

アフガニスタンの不安定→パキスタンを超えてインドにまで浸透するようになり、インド国家の安全は重大な挑戦を受けている状態になった

アフガニスタンの不安定→地域諸国政府の合意の欠如によってももたらされていて、合意は、パキスタン、インド、イラン、ロシア、中国、中央アジア諸国の間で必要

米軍→アフガニスタンの部族社会の伝統や文化などを考慮せずに活動してきた。夜、家屋に押し入ったり、女性に触ったり、アフガニスタン人を殺害したりした。こうした行為がアフガニスタン人に好感をもたれることがなかった

3万人の増派だけではまったく不十分だ。ソ連軍が撤退した後もタリバンが登場したように、アフガニスタンのイスラム勢力を軍事力で根絶することはとうてい不可能である。アメリカにそれほどの財力があるとは思わないし、ヨーロッパ諸国も増派を拒むだろう。ヨーロッパ諸国にはアフガニスタンでの戦闘に強く反発する世論がある。

タリバン政権崩壊後のアフガニスタンで復興への大きな期待が高まったが、それが実現されていないところが問題

→復興で実現したのは、カブールのナイトクラブ、5つ星ホテルという状態ではアフガニスタン人の幻滅を招くばかりだった。外国から援助団体も来たが、しかし治安状況の悪化でその多くが撤退を余儀なくされた。復興への期待が裏切られたこともタリバンが支持を集める背景となっている。

タリバンの軍事行動←ジャラルッディーン・ハッカニである。タリバンがプロパガンダをする時代は終わり、現在は行動あるのみという状態になっている。

ハッカニ→アルカイダと交流があり、かつてはアメリカのCIAやパキスタンのISIに協力していた。ハッカニは、かつてはムジャヒディンの指導者であり、アフガニスタンでアラブの「義勇兵」たちを訓練していた。ハッカニは、「イスラム統一体」のアブドゥル・ラスール・サイヤーフの片腕でもあった